

11 工藤“ワビ”良平さん・白井宏昭さん



工藤“ワビ”良平

中西“サビ”一志と共にデザインユニット「ワビサビ」として活動するアートディレクター、グラフィックデザイナー。SIAF2017では公募プロジェクト「札幌デザイン開拓使」を企画。SIAF2020・2024ではアートディレクションを担当。

白井宏昭

札幌を拠点とするフリーランスグラフィックデザイナー。SIAFには初回からデザイナーとして関わり、広告媒体や会場サイン、書籍など多岐にわたる制作物を手がける。

トーク内容

- アートディレクターとデザイナーの関係は「現場監督と職人」
- 「巻き込まれた」「客観的にみていた」2014。デザイン界の重鎮登場、課題も見えた2017
- 2020の難解なテーマを瞬間的に表現するコミュニケーションマーク
- 2024のシンボルマーク・雪の結晶のルーツは2014にあり？
- SIAFのポジションは「展覧会」よりも、市民に寄り添った「イベント」であるべき
- 最先端をみせる芸術祭には、それを受けとめる成熟したデザインを



インタビュー全編はYouTubeでご覧いただけます。
<https://youtu.be/GM6-mxg78Ks>



Q アートディレクター(AD)とデザイナー(D)の役割とは？

工藤：アートディレクターとデザイナーの関係って、現場監督と職人みたいなものなんです。現場監督は「塀を立てる」ことはしないけど、「どんな塀を建てるか」はきっちり職人に伝えて、それが立ち上がるまで管理しなきゃいけない。例えば「ここちょっと床が低くて上手くないかない…」っていうときに、現場監督はそれをどう解決するかを考えて、職人がスムーズに遂行できるようにする。それがADとDの関係なんじゃないかなと思います。

Q SIAF2024でお二人はどのように協働されましたか？

工藤：僕は現場監督のくせに職人のやることに手を出しちゃうタイプ。白井さんもADも務められる方なので「ADとD」というよりは「AD&Dの二人」で組み上げていきました。ポスターは最初、手分けして案を出したのですが、白井さんがクールな雪の結晶の案をつくってくれた。そこに、ディレクターの小川秀明さんが所属するアルスエレクトロニカで活躍している〇さんというイラストレーションを起用しました。

SIAFは限られた人だけではなくて、広く札幌市民に見ていただきたいということを特に意識されていると思います。それを踏まえて、冬開催の芸術祭を象徴する雪の結晶と、親近感のある〇さんを同居させちゃうという方法を、2024のビジュアルとして採用しました。2つを同居させないほうが、デザイン的にはシンプルだし、すっきり見える。でも僕は合体させていいと思って。僕の中でも新鮮でしたし、上手くいったなと思っています。

白井：なんで雪の結晶だったのかというと、実はSIAF2014で北海道立近代美術館に展示されていた、中谷宇吉郎さんの雪の記録写真が頭に残っていたんです。2024のテーマが「LAST SNOW」ということを聞いて、さらに小川さんから中谷さんについて言及があったりして。そこでピンとつながって、雪の結晶を大きく使うのがいいんじゃないかなと思いました。

そこで、中谷宇吉郎さんゆかりの北海道大学 低温科学研究所から画像を提供していただけないか、というところから古川義純さん(中谷宇吉郎 雪の科学館 館長)とつながりました。写真をたくさん見せていただいたのですが、解像度などデザイン展開に関して難しいところがあったので、3Dでオリジナルの雪の結晶をつくるのはどうだろうと。それで有限会社ノチウ(札幌市に拠点を置く3Dグラフィック制作会社)の佐藤 敦さんに相談したら「結構いいところまでできますよ」と返答をいただき、やることになりました。さらにCMも制作することになったので、雪の結晶ができる過程の映像も制作していただき、展開するにはとても便利なものになりました。
